

白梅通信

第2号

平成二十七年二月 日発行
石川県遊学館高等学校 文芸部

「白梅通信」第二号に目を通して頂きありがとうございます。更新が遅れてしまい申し訳ありません。

ところで皆さん、冬」という漢字の語源をご存知ですか？これにはいくつかの説が存在します。寒さに震う(ふるう)が転じたと言われる説、寒さが威力を振るう(ふるう)振ゆ(ふゆ)が転じたと言われる説、そして冷える」の古語 冷ゆ(ひゆ)が転じたと言われている説があります。この他にも様々な説が存在します。肌寒い季節ですが、体調を崩さず、しっかりと乗り越えていきましょう。

今回は通信には以前と同じように、短編小説や俳句の他に、新しく詩を載せてみました。私たちはまだ詩に関しては初心者ではありますが、それぞれ自信のある作品に出来上がっております。

最後に今回の作品を創つてくうちに思ったことなのですが、大切なのは、何かに挑戦するという意思だと私は思っております。

〈俳句〉

冬の夜 鼻水すすり 帰宅中
吹雪道 白銀世界 迷いこむ
帰り道 雪水かかり 気が沈む

冬の暮 白い足跡 あの子へと
この先も 皺腕組んで 年忘れ
ほろ酔いで 酸いも甘いも 闇鍋へ

〈小説〉

「炬燵」

うちのコタツには穴が開いている。

冬にコタツに入るとコタツから出られなくなることを「コタツの魔力」などといったりするが、うちのコタツには本当に不思議な力があるらしい。

こたつの中には、30cmほどの大きさの真っ黒い穴が浮かんでいる。つまり、厳密にはこたつの中の空間に穴がいているのだ。コタツをひっくり返すと、消えるが、また元に戻すと、現れる。

このこちらから触っても何も起こらない。が、穴からは毎年様々なものが出てきた。その頻度はばらばらだったが、必ず年に一度は何かが現れ、そして帰っていく。

——ある時は、仕事終わりのサンタさんがでてきた。

街からクリスマスモードが消えかけ、お正月モードに変わりかけているところに現れた。

サンタさん、なんて夢のある存在にもかかわらず、話してくれた内容はほとんどが愚痴だった。

「最近の子供はわがままだ」だとか「最近のおもちゃは仕組みが複雑で作るのが大変だ」だとか「最近おもちゃを作るための材料が値上がりしている」だとか。妙に生々しい愚痴を話すだけ話すと、満足して帰っていった。

初めてこの現象が起こったのは5年前、このコタツを実家から引き取ってきて電源を入れた夜だった。

出てくるものは、サンタさんのように人のようなものだったり、動物だったりいろいろだったが、なんと例外なく日本語を話すのだ。話したいだけ話して、帰っていく。

——ある時は、近所の神社の神様が現れた。

これまた話の内容は愚痴が大目だった。ファンタジーな存在ほど愚痴が多い気がする。人間に根拠なく過信するので

いろいろとプレッシャーがあるのかもしれない。

「最近の人間は欲張りだ」とか「最近の巫女は穢れている」だとか「最近には神に頼り努力することを怠っている人間が多い」だとか。耳が痛くなるような話も聞かされた。

この現象には、はじめこそ動揺もしたが、思い入れのあるこたつだったので捨てるに捨てられず、時間がたつうち慣れてしまっていた。出てくるものは、コタツから離れることがなかったので特に害はなかったし、一人暮らしの寂しい生活のなかで、様々な話を聞かせてくれる相手が現れるこのサブライズが、むしろ少し楽しみになってきてしまっている節さえあった。

それに、この現象がどういう仕組みなのかはさっぱりだったが、原因自体には心当たりがあったのだ。まさか、とは思っただけれど、それは、ある日に確信に変わった。

——一月十日、毎年その日は現れるものがきまっている。

「おー。おかえり。」

仕事から帰ると、聞きなれた気の抜けた言葉に迎えられる。リビングの戸をあければ、こたつで、祖父が勝手にビールを開けてくつろいでいた。

今は亡き祖父が。

今は亡きというのには現在から見るとという意味ではなく、その時点で、既に亡き祖父だった。

「…たがいま。」

「晩御飯つくっておいたぞ、食うかい？」

「食べる。」

祖父の反対側にすわり晩御飯を食べながら、最近の近況だとか、体調はどうだとか、取りとめのないような話を交わす。ご飯を食べ終わった後も話し続け、夜は更けていく。

日付が変わる間近、祖父は最後に、私に言葉をかけて、満足したような顔をして、帰っていった。

時計の長針が真上をさし日付が変わり、私の誕生日が終わる。

祖父の「誕生日おめでとう」という言葉を思い出しながら眠る準備を始めた。

もともとこのこたつは、祖父のお気に入りのもだった。

私が十歳のときに亡くなった祖父。祖父は人を驚かせたり楽しませたりと、サブライズをするのが大好きな人だった。人と話すのが下手で友人の少なかつた私は、いつもそんな祖父と一緒にいた。

とある年の私の誕生日、こたつに入っていた私に対し祖父はニコニコとしながら言った。

「わしになにかあったらこの炬燵はお前に譲ろう。このこたつは不思議な力がある特別なものだ。お前が寂しくならないよう、特別な仕組みをつけておいた。」

私はどういふことなのかとんとわからずキョトンとしていた。炬燵にもぐりこんで調べてみても、特別なところは見つからなかった。

数年後、祖父が亡くなり、約束どおりこたつは私のものになった。とはいえ、まだ十歳で実家に暮らしていた私が譲り受けたところで、何も変わらずこたつはそこにあり続けた。

一人暮らしを始め、こたつは私の部屋に運ばれ、私は祖父の言葉の意味を知った。仕組みはまったくわからないし、度が過ぎたサブライズだと思った。そもそもこれが本当に祖父の言った仕組みなのかも怪しかったが、こたつが運ばれてから始めての私の誕生日、現れた祖父を見て、確信をした。

一人暮らしの部屋、雪が音をすってしずまりかえる冬。だけれど私は、寂しくない。寂しいと思ってしまうような日には、必ずあのこたつで誰かが待っている。

「鮮やかな意味」

情熱を色で例えるならそれは赤だ
真っ赤に燃える炎のように熱く
そして簡単には消えない

自由を色で例えるならそれは青だ
どこまでも続く大空のように広く
誰にも縛らずどこまでも続く

平和を色で例えるならそれは緑だ
人畜無害な木々のように静かで
平凡な毎日を生きていける

終わりを色で例えるならそれは黒だ
眼を閉じるとそこは一面暗闇の世界
それは一生を終えるような感覚である

始まりを色で例えるならそれは白だ
何もない白紙から新たな色が生まれる
新しい生命いのちが生まれるように・・・

今日もまた新しい生命いのちが生まれる

「ちょう」

白いキャンバスを買った
だけど絵は描けないから
切り絵をすることにした

ハサミとキャンバスを持って家を出る

ガサガサと
葉の欠片を切り取った

じやりじやりと
木の実の欠片を切り取った

ざくざくと
土の欠片を切り取った

がりがり
と
石の欠片を切り取った

ざばざばと
海の欠片を切り取った

ごうごうと
太陽の欠片を切り取った

バリバリと
蝶の欠片を切り取った

欠片を集めて貼り付けた

「あなた」

目ん玉がトマトな僕
腕がバットな彼

妹の髪はラーメン

叔父の顔はサッカーボールで

先輩の音が機械音

嫌いなあの子の口は花

彼女の腕が彼の腕

弟の髪が妹の髪

叔母の顔は叔父の顔で

後輩の音が先輩の音

憧れのあの娘の口が嫌いなあの子

そして僕の目を持つ誰か

そんな僕らをなんと呼ぶのだろう

なんと呼べばいいのだろう

なにをもって僕というのか

なにがあって彼らになるのか

一人じゃそれはわからないから

きっとあなたが必要なのです

とっても素敵なお絵ができた

とっても素敵なお絵だけの景色

なのに何か足りない

どれだけ近くで見てもわからないので

思い切って私を貼り付けた

足を、手を、頭を、体を、服を、貼り付けた

ぐるりと周りを見渡した

冷たくて暖かくて輝いている

私の景色

と

蝶が目の前を飛び去った

やっと無いものに気がついた

私はテープレコーダーを買いに歩き出す

しまった。財布を貼り付けていなかった。